

東アジア「地中海」における 歴史生態基盤の地域性と文化交渉

野 間 晴 雄*

1. 東アジア「地中海」の定義とその性格

海には、その相対的大きさや形状から、海洋 (ocean)、海 (sea)、湾 (bay)、縁海 (marginal sea)、沿海 (shelf sea) などの区分がある。一方、外海に対する内海 (epeiric sea, inland sea) とは、陸地と陸地の間に挟まれ、海峡で大洋に連なる海である。地中海や紅海がそれにあたる。しかも内海には、海中に大陸棚をもつ海という性格を言外に含んでいる。

それらの海を大別すると、陸地に囲まれた海域＝地中海／付属海・縁海と、海域に囲まれた陸域＝大洋／海域世界がある。太平洋、大西洋、インド洋の3大洋のなかで、大航海時代以前に海域世界を形成していたのは太平洋とインド洋であった。太平洋はアウト・リガー船、大型ダブル・カヌー船を航行手段として奥オセアニアの島々をノード（結節点）とするネットワークをもち、インド洋はアラビア半島・アフリカ東沿岸とつながるダウ船による海域世界であった¹⁾。

海域に囲まれた陸域、すなわち海域世界では、圧倒的に水域面積が広く、かつそこに関わる陸域では人やものの移動・流動が常態である。その多くは大洋にかかわるものであるが、濠洲地中海といわれるスダ列島、フィリピン諸島、ニューギニア島、オーストラリア大陸で囲まれた海域には、港市を結節点とするような柔軟なネットワークが形成されていた。A. リードが扱った1450～1680年のいわゆる「東南アジアの交易時代」の主要舞台は、ほぼこの海域にあたる。これは、「東南アジア地中海」とも呼ぶべきもので、南シナ海、ジャワ海、インド洋の一部を含む多島海域で（後掲の図5参照²⁾、森と海を生態基盤として、森林生産物や海産物の流通

* 関西大学文学部教授 関西大学 ICIS 事業推進担当者

- 1) 応地利明「人類にとって海はなんであったか」（大塚柳太郎・応地利明・森本公誠・松田素二・朝尾直弘・ロナルド・トビほか『人類はどこへ行くのか（興亡の世界史20）』、講談社、2009、140-141頁。
- 2) A. リード著・平野秀秋・田中優子訳『大航海時代の東南アジア1450-1680年 I 貿易風の下で』、法政大学出版会、1997、同『大航海時代の東南アジア1450-1680年 II 拡張と危機』、法政大学出版会、2002（原著は1993）。ネットワークはマレー系の人々によって担われていたことが主意であり、その開始はヨーロッパの大航海時代よりも早く、かつ終了も遅かった。スペイン・ポルトガルによるいわゆる「地理上の発見」時

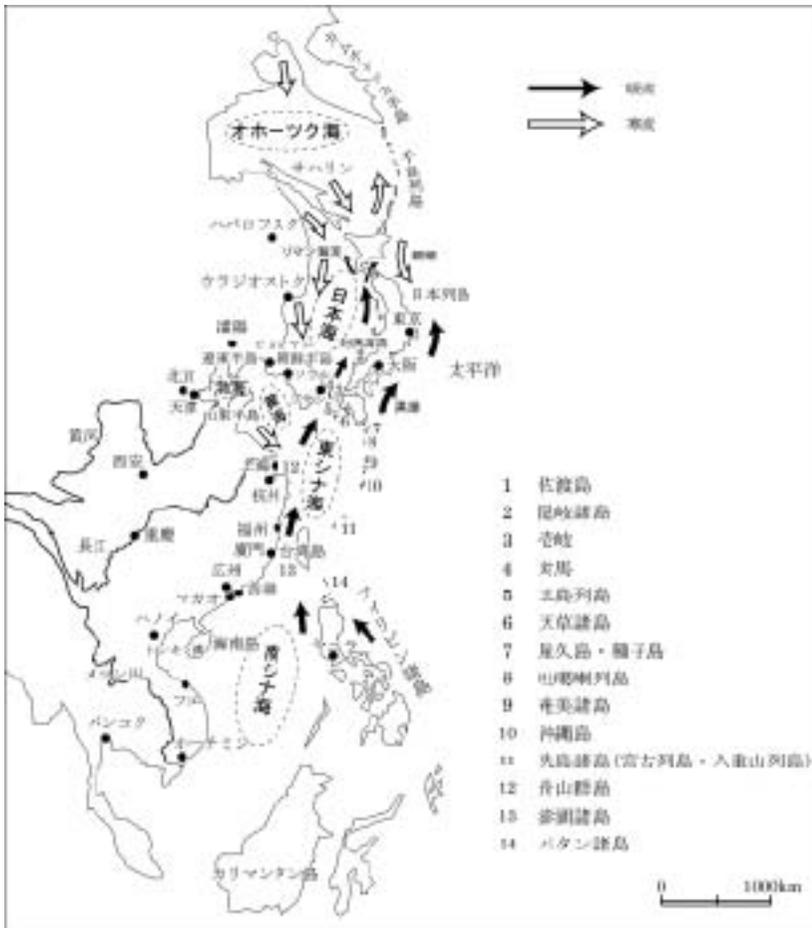


図1 東アジア「地中海」の範囲と主要島嶼

による海域世界 (maritime world) が展開した。

この地中海はポルトガルやオランダ・イギリスなどの進出によって、17世紀末には域内交易やインド洋域との交易の全盛期は過ぎ、より広範なヨーロッパ・アジアをつなぐグローバルシステムに包摂されていく。しかし外世界との交易の重要性が増すなかで、相対的な域内交易の重要性は減じても、交易自体が域内で衰退するわけではない。海上交易がなければこの海域世界では生活が成り立たない。人を寄せ付けぬ熱帯林が全体を覆い、風土病が猖獗する湿潤な島の内陸部では、農地開発の余地はきわめて限られていたのである。その意味から、リージョナルなネットワークと、広域ネットワークが併存していた海域世界に変化したというのが正し

代=大航海時代(通常は15世紀末から17世紀初めまでをさし、17世紀後半からのイギリス・オランダ・フランスの制海権抗争の時代は含まない。大西洋世界が貿易圏として統合され、アジアを含む世界システムの基礎が形成された時代である。

い解釈であろう。

しかし、本報告でとりあげる「地中海」は、ほぼ陸地で囲まれた大きな海水域・内海である。付属海の種類として分類され、その性格がかなり異なる³⁾。地中海の語源は、ラテン語のメディアウス（間）・テラ（土地）という一般名詞である。この地中海は、狭い海峡などによって外とつながる。その面積の相対的な大小で、大地中海と小地中海に分けることもある⁴⁾。ただし、世間一般には、「ヨーロッパ地中海」がなかば固有名詞のように用いられることが多い。

これらの「地中海」のなかでは、さほど人口に膾炙していない“東アジア「地中海」”（図1）は、どのような社会・経済システムをもち、いかなる歴史生態基盤を有するのか。本報告の前半では、“東アジア「地中海」”を文化交渉というキーワードからそのサブ空間ごとの基本的な特色を論じる。後半では、“東アジア「地中海」”内の、メソスケールとミクロスケールの文化交渉の事例を、東シナ海域と日本海域という2つのサブ空間で考察する。これらの含意は、東アジアというきわめて中国＝漢民族世界の影響力が強い陸域⁵⁾の文化圏を、その合わせ鏡である海域からの視点で、地域スケールを変えながら考える試みである。最後に、ヨーロッパ地中海との歴史生態の相違を、ブローデルの『地中海』の論旨をもとに比較考察を試みる。

高谷好一は「国境という近代の産物をもとに線引きをするのでなく、そこの生態や文化や社会に根ざした存在、人類にとって意味ある存在としてとらえた「世界単位」のなかで明確に識別できる単位として中華世界＝東アジア世界をあげ、その統治の形は、「草原の武力は使える部分は自分の輩下として利用するが、それ以外は撃滅する。オアシスを通じてやってくる富と情報は一人で独占する。従順な農民は庇護の下におく。中国は強い天子と、よく働く農民からなるのが理想である」という基本的な姿勢」であり、強力な求心力をもつ「中心社会型」を最大の特徴としてあげる⁶⁾。

浜下武志は東アジアの地域モデル、とりわけジオ・ポリティカル（地政学的）な地域配置を考えるために図2を提起した⁷⁾。ユーラシア大陸のいちばん東にある大陸部は中国を中心とした

3) 付属海 (depended sea) は、縁海と地中海に分けられる。縁海は大洋に隣接し、広く開いた海域である。海底では海嶺などによって区画されたなかば閉じた海域となる。深度が浅く、大陸棚がよく発達するため、有機物・プランクトンなど栄養物が豊富で好漁場となるが、流入する河川による汚染の恐れも大きい。ここでは独自の海流系・潮汐を有さず、大洋や流入河川の影響を受ける。対馬海流は黒潮（日本海流）の分派の暖流であり、流速は1ノット（時速1.8km）と、黒潮の3～5ノットに比べて遅い。これは航海の容易さにもつながる。

4) 大地中海とは、ヨーロッパ地中海のほか、北極海、アメリカ地中海、東インド諸島地中海（スル海、セレベス海、モルッカ海、ジャワ海などの総称）をさし、狭義の地中海はバルト海、ハドソン湾、紅海、ペルシャ湾などをさす。

5) 野間晴雄「東アジア文化交渉学方法論序説（その1）—フィールドとしての周縁と研究調査のための視座—」、関西大学文学論集、第60巻第3号、2010、81-100頁。

6) 高谷好一『新世界秩序を求めて—21世紀の生態史観—』、中央公論社、1992、146-147頁。

7) 浜下武志「環シナ海域の視点から」（川勝平太編『海から見た歴史—ブローデル『地中海』を読む—』、藤原書店、1996、169-172頁）。

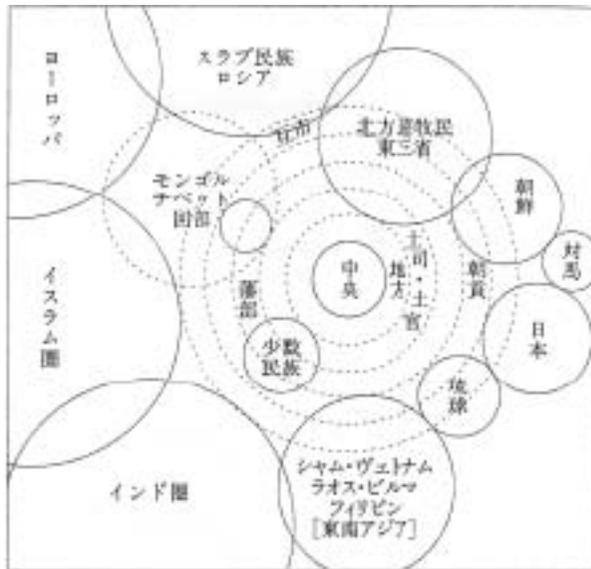


図2 清代を中心とした中国と周縁関係
(浜下武志 1996による)

華夷秩序の編成原理が優勢である。ここでいう中央は華北・中原を中心とした漢民族の陸域世界の都〈みやこ〉＝首府であり、「天下」・「天朝」であった。それを中心として皇帝との結びつきの濃淡によって理念的には同心円状に周辺の領域の範疇が分類された⁸⁾。中央の外側には漢民族が住む地方が、さらにその外縁には土司・土官が統治する領域がある。この土司・土官とは、元以降の歴代中国王朝が、隣接する諸民族の支配者たちに授ける官位の総称である。ミヤオ(苗)族やチベット族など南西諸民族に対して授けた。さらにその外には藩部がある。これはモンゴル、回部(新疆)、チベット(蔵地)、満州人など内陸アジア世界の範疇である。いわば中国にとっては域外ではあるが、一体の版図として19世紀末までに意識された空間であった。

漢字文化、儒教、科挙官僚を指標とする朝貢という領域がさらにその外側に存在した。さらにその周縁には細々と通商のみを行う互市の存在があった。琉球や朝鮮、ベトナムの歴代王朝は朝貢という位置づけであった。鎖国時代の日本は長崎を窓口とする互市の立場にあった。当然のことであるが、朝貢の方が中央との従属性が強い。それだけに「来たるを薄くして往くを厚くする」(『中庸』)持参品の数倍の見返りが期待できた。商品カタログを見せられて必要なものを持って帰ることが可能な、皇帝の恩と徳を朝貢側にわからせて恭順の態度をとらせる行為でもあった。逆に視点を周縁に移すと、近世の日本は、いわゆる「鎖国」によって自給自足経済を達成し、日常の生活経済では中国からの自立が達成できた⁹⁾。牛馬の代わりに家族労働力を

8) 平野聡『大清帝国と中華の混迷(興亡の世界史17)』, 講談社, 2007, 258-259頁。

9) 生糸・砂糖・薬種、香木(紫檀・黒檀)・白銀などの奢侈品の輸入は続いたが、ここで筆者が強調したいのは、米や特有物産、木綿、綿織物、陶磁器などの生活必需品の自給体制の確立である。

惜しみなく注ぎ込む、労働集約的な「勤勉革命」(industrious revolution)¹⁰⁾によって、成熟した経済社会を実現したといえる。

この陸域型社会の周囲には、“東アジア「地中海」”という海域が広がる。この海域での沿岸やその背後にある大陸東アジアの交流の主体は、千島列島、日本列島・南西諸島、台湾と連なる周縁の場と人々である。本報告は、そこに焦点を移行させる所作でもある。

2. 東アジア「地中海」のサブ空間

ところで“東アジア「地中海」”に関連する用語としては、国分直一が先史時代における「東亜地中海」をオホーツク海、日本海、東シナ海、南シナ海としたことがまず想起される。戦前に自らの学問の基礎を形成した台北帝国大学や台湾がその発想の原点であった¹¹⁾。千田稔は国際日本文化研究センターでの共同研究のタイトルを「東アジア地中海世界における文化圏の成立過程について」とした。ここでは、類似した文化的特色の分布する空間的広がりを文化圏として、南シナ海、東シナ海、日本海、黄海、渤海よりなる海域を指すと定義した。

近年では、富山県が日本海に位置する自県がいかに極東ロシアや中国東北地方とつながりが地理的に近いかを示した北と南を逆にした350万分の1「環日本海諸国図」を1995年に作成し、日本海域の交流を強調している¹²⁾。網野善彦によってこの地図を用いて、いかにこの海域が地中海の性格をもっているかを、強烈なイメージとして印象づけた¹³⁾。

とりあえず、ここでの東アジア「地中海」は、千田が規定した1)南シナ海、2)東シナ海、3)日本海、4)黄海、5)渤海域に加えて、千島列島と極東ロシアに囲まれた6)オホーツク海域を含んだ範囲としておきたい。ただし、このプロジェクトの対象とする国を念頭に置いて、南シナ海に関係する国としてベトナムは含むが、その他の東南アジア諸国は除外する。

ただ、この6つの小地中海を構成する東アジア「地中海」は、ヨーロッパ地中海のように、ユーラシア大陸とアフリカ大陸、アラビア半島という大陸の陸域に囲まれているわけではない。多分に縁海、付属海的な要素をもつ。海域につらなる島嶼がその彼岸にある大陸や半島をささんだ断続的な陸の空間とセットとなる(図1参照)。北から南へ、サハリン(樺太)、千島列島、日本列島、南西諸島(宮古・八重山諸島、琉球列島、奄美諸島、吐噶喇列島(トカラ列島と表記することも多い)、台湾、フィリピン諸島など断続的に島嶼列が連なる。その間にはいくつもの海峡やかなり広い開水域が点在する。それは海峡、水道、灘などスケールの違いはあっても、その境界は帯状の面である。時には近代の国境がその中に線としてひかれることもある。

10) 速水融『近世日本の経済社会』、麗澤大学出版会、2003。

11) 千田稔編著『海の古代史—東アジア地中海考—』、角川選書、2002、9-10頁。

12) かつては富山県のHPにもあげられ、石川県・新潟県などとも協力して、環日本経済圏が強調された。

13) 網野善彦『日本とは何か(日本の歴史00)』、講談社、2000、口絵。

しかし、上の島嶼列を基準に考えるならば、彼我の境界の位置は時代によって異なるとともに、それが時として点でもあり、線でもあり、面でもあった。15～16世紀の蝦夷地では、和人とアイヌ民族との境界に多くの日本式の城（松前十二館）が築かれたが、交流・交易も活発に行われた¹⁴⁾。かつては東北地方まで及んだアイヌの居住域がしだいに蝦夷地まで後退した結果でもある。“東アジア「地中海」”域は、氷河時代以前まで遡ると、現在の様相と大きく異なるが、直近2000年のオーダーでは大きな水域の変化はない。

このような時間スケールの「長い歴史」の観点からは、海域自体は絶対的存在としてみなしてもよい。それを利用する人間、社会、国家の有り様によって、その持つ意味が大きく変化する。海域を越えて陸域を結ぶのは船である。船は、海流、風向、気象条件に大きく左右されながらも、任意の二地点間を、人とものを安価かつ大量に運ぶことができる。その速度、到達時間には航海術や船の技術構造が大きく関わる。とりわけ、東シナ海、台湾海峡から南シナ海にかけて海上の制海権を14世紀後半から20世紀初頭まで500年以上にわたり握っていたのは中国の海商（商人）である。海禁策をとった明代後期には公式の航行は激減したが、それ以外の時期、とりわけ清代には全盛を迎えた。彼らはこの海域の航行に有利な船を建設する技術と航海術をもちあわせており、朝貢国の航走にも一役買っていた。また漂流・難破した他国船を本国へ送還する手助けをしたのも彼らであった¹⁵⁾。

以上のことを踏まえ、まず“東アジア「地中海」”のシステムや次元を考慮したサブ空間を設定してその文化交渉を記述していきたい。

(1) オホーツク海

オホーツク海はサハリンとカムチャッカ半島、千島列島に囲まれた縁海という性格をもつ。寒流の親潮（千島海流）が南下し、冬期には海域が結氷し、港湾としては機能しなくなる。北海道のオホーツク海沿岸に流水限界がある。オホーツク海南岸の文化はサハリンとアムール川下流域を原郷土とする漁猟・海獣狩猟民で海岸居住のオホーツク人によって培われた。彼らはシベリア・サハリンとの交易をしていた北に目を向けた民族で、和人との交易で南に目を向け、竪穴式住居に住む。海岸から河川を遡って内陸部にも居住した狩猟・漁労・採集民（一部農耕）のアイヌとは対照的である¹⁶⁾。

サハリン（樺太）は南北950km、東西30～160kmに及ぶ山地が卓越する細長い島である。松前藩が古くからその経営にあたり、1807年以降は江戸幕府の直轄領となるが、文政4（1821）

14) 服部英雄「アジアの中の日本」（服部英雄編『史跡で読む日本の歴史 8 アジアの中の日本』、吉川弘文館、2010、9頁）。

15) 松浦章『近世東アジア海域の文化交渉』、思文閣出版、2010、i、415-443頁。

16) 宇田川洋「オホーツク文化」、前掲14、242-243頁。

には旧に復し、幕末の安政2（1855）年には箱館開港にともない、蝦夷地を上知せしめた¹⁷。南下するロシアに対抗して間宮林蔵（1775-1844）の探検隊を送るなど両国の勢力の前哨拠点となった。日本海とはタートル海峡（間宮海峡）をはさむが冬期は凍結するため、海域と陸域が季節によって連続する海でもある。

冬季に結氷する海域という宿命は、極東沿岸に不凍港を求めたロシアの南下政策と大きく関わる。ロシアにとって、ウラジオストクは日本海沿岸に設けた念願の不凍港である。そこを拠点として、さらに現在の中国黒竜江省、吉林省、遼寧省域に進出を企てた。アムール川（中国名は黒竜江）の支流である松花江を遡ってハルビン^{ハルビン}に拠点を設け、東清鉄道を建設した。ロシアの近代の東アジア進出へのベクトルは、オホーツク海域から日本海域北部へ転換し、港湾建設や内陸への河川流域を遡上していった。

(2) 日本海

アジア大陸の東岸、朝鮮半島と日本列島の間にある北太平洋の縁海で、面積100万 km²、平均水深1350mである。大陸との間には北から日本海盆、大和海盆、対馬海盆の3つの海盆の存在によって、最深部は3500mを超える。もとは大陸に付属していた内陸盆地であったが、日本列島が形成された第三紀中葉のグリーンタフ変動によって陥没して、日本列島と切り離された。間宮、宗谷、津軽、対馬、関門の5つの海峡は水深が200m以下で、外海と連なる。黒潮の分流である対馬海流が北上するため、緯度の割には温暖で、暖地性の植物・作物の北上が著しい。北からは大陸に沿ってリマン海流が南下する。日本海側の冬期の降水量、とりわけ降雪の多さから、世界でも特異な気候区となっている。そこに張り出た能登半島や佐渡島、隠岐島、飛鳥などの離島はこの海域を航行する船の寄港地、避難港となった。敦賀、能登半島福浦や日本海沿岸の直江津、秋田（土崎）などの港はこの日本海を横断した渤海交易で古くは知られてきた。

遼東半島先端に近い大連も、もとはロシアの南下政策による港湾として建設が進められた新しい都市で、日露戦争後は隣接する旅順を含めて、日本の満州進出の重要港湾となった。

ハルビンはロシア南下の内陸拠点となった松花江中流の荷揚げ地である。鉄道5本の交差点でもある交通の要地でもあり、ロシア風の街づくりが行なわれた。日露戦争に勝利以後に開発を引き継ぎ、1932年に満州国という傀儡政権を樹立以後は、大豆の一大産地の集散地として発達した。また、長春は19世紀以降に漢民族が入植した地で、清末にロシアが建設した東清鉄道南部支線が通るようになり、日露戦争以後にここ以南の権益が日本に譲渡されると租界や商埠地が設けられた。満州国建国の際には首都となり新京と命名された。

日本列島（北海道、本州、四国、九州）は、日本海域というサブ空間のなかでは、最大の人

17) 幕府の蝦夷地経営は黒字であったが、ロシアの南下の恐れがあるときは直轄にし、北辺への警備の意義が薄れたときは松前藩に経営を任せている（渡辺京二『黒船前夜—ロシア・アイヌ・日本の三国志—』、洋泉社、2010、343-345頁）。

口と生産・居住域をもつ。耕地面積の比率は国土のわずか12%にすぎないが、環太平洋造山帯の一部にあたるため、列島には褶曲山脈、火山帯、地震帯、断層帯が数多く分布し、地体構造はすこぶる複雑である。土砂崩壊、地すべり、洪水、地震、津波など災害の種類も頻度も多い。北海道・本州は日本海域に位置するが、西南九州や南西諸島は東シナ海域にある。

日本海は、関門海峡によって瀬戸内海という小地中海というべき海域につながる。下関（近世の赤間関）がその結節点となった。瀬戸内海は古代以来、畿内から西への大動脈であった。飛石状に島嶼が点在する多島海は帆船の航行・寄港を容易にした。しかし花崗岩質の痩せ地が多い島の状況のため、早くに人口が稠密となり、人びとは島外への移動を余儀なくされるか、さまざまな生業を組み合わせることで生計を維持せざるを得なかった。ここには、^{えふね}家船とよばれる移動漁民の根拠地（三原市能地などが著名）や、浦といわれる狭小な土地にへばりついた漁業専門村が、半農半漁の沿岸の村にまじって点在した。岡山県の^{ひなせ}日生、芸南諸島の豊島などがそれにあたる。その高度な漁業技術（日生でいえば、打たせ網漁法）をもった人びとは、東シナ海の朝鮮半島沿岸の未開発海域に進出し、近代朝鮮漁業の発展に貢献した。

泉州佐野の漁民が対馬・五島列島などに進出するのもこの一連の流れである。ただし、紀州漁民に関しては、捕鯨の基地である太地や串本が壱岐や平戸など西海捕鯨に技術伝播するのに対して、紀州南部の漁業者の多くは、関東、とりわけ房総半島にその技術を伝えた。醤油づくりなど漁業以外で関東への伝播した技術に果たした役割も大きい。ただし、この黒潮を利用した船の航行は、卓越した航海術を前提とする。

(3) 渤海域

中国第一の面積をもつ山東半島と、第二位の遼東半島の間にある内海である。面積7.8万km²、長さ280kmで、東は渤海海峡を通じて黄海に接続する。平均水深18mと浅い。渤海にさらには遼東湾、渤海湾、南部には莱州湾という3つの湾が付属している。渤海に流入する河川は黄河、遼河、海河などである。黄河デルタは流出土砂が多く、円弧状デルタを呈する。遼河デルタは構造性の東北平原に由来するため河口の土砂堆積はさほど多くないが、多くは湿地となりアシが群生する。碱蓬草（マツナ）の群落はアルカリの土質に生育し、夏から秋にかけて赤い砂浜に変化する（紅海灘）。潮の干満の差が大きい。渤海では沿岸漁業が盛んで、主要な漁港としては煙台がある。しかし沖合・遠洋漁業は発達しなかった。雨が少なく干満差が大きいため、製塩も盛んである（天津付近）。

1960年から始まった渤海の油田探査により盤錦を中心とした石油資源開発や、湿地に水路を開削して水田を造成し、ジャポニカ品種による米の一大生産基地となっている。海域内には島嶼は少なく、沿岸の出入りも比較的単純である。むしろ朝鮮半島西海岸の諸港と中国山東省との関係が強く、ロシアや日本が建設した大連などの港がこの海域のハブとして注目されている。

なお、渤海、その後継である女真などツングース系の狩猟・農耕民族は、元来、日本海域に

開いた国家であったが、金（1115～1234）の時代にはこの渤海域を含むその南の地域も支配し、徐々に漢人との融合も進んでいき、それが清朝（1636～1912）の基礎となった。

(4) 黄海域

山東半島、朝鮮半島によって囲まれ、南は長江河口と濟州島を結ぶ水域面積38万 km²の半閉鎖的な縁海である。平均水深は44mである¹⁸⁾。日本とほぼ同じ面積の浅海域で、渤海の4倍以上の広さをもつ。山東半島側には大連、青島、また大陸、長江河口には上海という大都市・港湾をもち、この背域には畑作と稲作の境界となる淮河があるなど、有力な中国経済圏のひとつをなす。朝鮮半島側には南浦（ナンポ）、仁川（インチョン）、木浦（モクポ）などの港をもつ。ただしこの海域についての筆者の知見はまったく暗く、他日を期したい。

(5) 東シナ海

朝鮮半島、中国大陸、九州島、南西諸島、台湾で囲まれた太平洋の縁海で、台湾海峡で南シナ海、朝鮮海峡で日本海とつながり、北は黄海に続く。面積77万 km²と黄海域の2倍の広さをもつ。平均水深349mで、沿岸域は世界最大の大陸棚の一部となっている。この海域の外側には、琉球島弧の内側に沿って台湾から九州に延びる沖繩トラフ（海溝）が延びる¹⁹⁾。

南半分の海域は亜熱帯性で、サンゴ礁の発達が見られる。吐噶喇列島までは西日本火山帯のフロントとなり火山が見られるが、その外側（外弧）に、奄美群島、沖縄島、先島諸島（宮古列島、八重山列島）、台湾島がたつらなる。この外弧は新生代後期以降の非火山性の隆起帯である。

南西諸島はその地形的特色と環境利用を考慮した景観である、「高い島」と「低い島」に分けられる²⁰⁾。「高い島」は隆起帯の基盤が海上に出たもので古成層からなり、「低い島」は隆起サンゴ礁による低平な石灰岩起源の地形からなる。

いずれの島嶼も河川には乏しく、降雨が夏前後に集中するため、通年安定した水の確保が難しく、飲料水適地も少ない。そのため、いかに夏期の降水を集め有効に使うかに腐心した。

稲作適地は湧水の得られる隆起石灰岩凹地（ドリーネ、ウバーレ）や段丘崖、沿岸地に限られる。元来この地域は、アワ・ムギなどの畑作が中心であった。しかし、中国華南地方から伝えられたサトウキビが琉球や奄美群島に近世期に重要な商品作物として入り、薩摩藩・琉球の重要な産物となった。強制的な作付けが地域によっては伝統的な農耕体系をいち早く改変され

18) 越済・陳傳康主編『中国地理』、高等教育出版社、2006、108-109頁。（華文）

19) 太田陽子・小池一之・鎮西清高・野上道男・町田洋・松田時彦『日本列島の地形学』、東京大学出版会、2010、2頁。

20) 目崎茂和「琉球列島における島の地形的分類とその帯状分布」、琉球列島の地質学研究5（琉球大学理学部海洋学科）、1981、91-101頁。

小林茂『農耕・景観・災害—琉球列島の環境史—』、第一書房、2003、3-6頁。

ていったことも銘記すべきである。現在は温暖な気候を利用した花きや亜熱帯性の果樹、ジャガイモ、サトイモ、ニンニクなど根菜商品作物と畜産が農業の中心となっている。台風被害を回避することが、冬作物重視の農業体系を形成しており²¹⁾、この流れは、南シナ海の諸島やフィリピンのバタン島、ルソン島北部まで続く²²⁾。

東シナ海の南端にあるのが台湾島である。脊梁部には南北に3000m級の山地が走り、東側は険しい隆起海岸地形をなすが、非火山性であるところが日本列島と異なる。台湾海峡よりも南の海域は南シナ海となる。サンゴ礁やマングローブが陸と海の接触域に分布し、潮間帯が日々の生活の舞台ともなった。

ただし、琉球・沖縄では、専門的な漁業者は糸満出身者のみで、他は農業が中心であった。まったく海洋的な世界に場所性を持ち、古琉球という時代には東シナ海や南シナ海をまたにかけた仲介交易が王国の財政の要となつたにもかかわらず、船は中国船を調達し、乗組員も中国ほか多国籍であるなど、かならずしも移動・流動の激しかった人々とはいえない。

ただし糸満だけは、追い込み網という潜水技術にも長けた集団漁法を武器に、東シナ海各地の好漁場をまわり、人が住まない集落の外れや僻遠の地に定着して集落形成も行なつた。与論、奄美・五島列島をはじめ、日本海や太平洋沿岸にも進出し、また、アメリカやカナダ、オーストラリアなどの漁業移民としても20世紀前半まで活躍した。とりわけ最後者は、スダ陸棚に代表される大陸棚や浅海が多く、A.リードのいう「東南アジア大航海時代」の主要舞台となつた。ここでもマレー系のいろいろな海洋民と競いながら、なまこ、白蝶貝など、獲物の種類は変えながらも、南方の海を渡り歩く中国系商人のネットワークのなかで糧を得てきた。なお、台湾や南西諸島の東側には黒潮の主流があり、たいへん早い流速で北上する。ここを航行する技術は誰でも可能であつたわけではない。

このように、東アジア「地中海」にあつて、島嶼は全方向的に海とつながるオープンシステムを形成しており、中国の大陸域や朝鮮半島とは異なる性格を有する。琉球と明・清との交流は、福州に琉球館（柔軟駅）を建設し（それまでは泉州）、1469年以降400年にわたる琉球と中

21) 佐々木高明は、サトイモアワの輪作体系、刈取り後に出る自然に出でる稲をも収穫する《ヒコバエ育成型》の中世旧暦10月播種、6月収穫の冬作型的稲作、播種儀礼を重視する古い畑作文化の特色、牛・水牛や人力による踏耕の存在、熱帯ジャポニカというDNA 遺伝学から見いだされたブルといわれる赤米を含む大型米などの証拠から、南西諸島を北上するオーストロネシア系（マレー系）の農耕技術としてとらえている（佐々木高明『南方からの日本文化（上）』、日本放送出版協会、2003、118-218頁）。

22) 野間晴雄「フィリピン・コルディリエーラ山地の棚田と遺産ツーリズムの課題—文化的景観としての世界文化遺産と地域社会—」、関西大学東西学術研究所研紀要、第41輯、2008、103-136頁。世界文化遺産となっているイフガオ族の棚田の基層にはサトイモとイネの混作や収穫後の刈り株から二次的な発芽（ヒコバエ）を期待するなど根栽農耕文化の影響が強い。NOMA Haruo. Tradition, Replacement and Transformation of Vegetative Propagations and Winter Crop System in the Ryukyu Islands: A Cultural Geography of Taro, Lily and Chrysanthemum Horticulture, The Inaugural Meeting of the IGU Commission on Islands and Island Geographies, 2007年10月30日、台湾大学。

国との進貢貿易が東シナ海を東西に横断することで行なわれた。流速の速い黒潮を横断するため、高度な操船技術が要求された。柔遠駅は福州城外東南の水部門外の地に建てられた。琉球からの進貢使は毎回約200人で、そのうち正使・副使とその従者、通事など20～30人が北京まで行くことを許された。

この琉球文化にみられる防風をかねた家を囲む石垣や抱護林、付属屋としての豚便所、納屋、高倉、開放的な居住空間、風水思想による家の立地や頻繁な集落移転、曲がることをよしとする道路、石敢当²³⁾、ヒンプン²⁴⁾の分布など、中国北部の様式だけでは理解し得ない南中国や東南アジアにつながる、南シナ海沿岸の要素が含まれていることも文化交渉としては重要である。

台湾島は台湾海峡をはさむ福建省との関係が深い。中国大陸から見れば、台湾は未開のフロンティアであった。先住民はオーストロネシア（マレー）系住民で、現在その多くは高山族といわれ、台湾山脈（中央山脈）の山麓から島の東岸に多く分布する。これは漢民族の開発の進出による後退の結果である。現在では蘭嶼のヤミ族はタロイモ、とりわけ水田（水芋田）でのものが中心で、そのほか畑サトイモ（旱芋）やヤムイモ類（山芋、山薬）など焼畑で栽培するほか、近年ではサツマイモが主食の中心となるなど、一貫してマレー系の根栽農耕文化がその基底にある²⁵⁾。

東シナ海の北半の海域は日本にとって、中国という異国と最も早くに接する機会がある^{ゲートウェー}門戸であった。平戸では16世紀半ばポルトガル船来航以降、オランダやイギリスの在外商館が設置され、それに続く長崎の発展への橋渡しをした。南九州では、現在の陸域からの発想では僻遠の地になる坊津が薩摩藩の密貿易拠点でもあった。

この東シナ海の西九州沿岸部は松浦党の活躍にみるような海域世界を形成していた。末子相

23) 高橋誠一「石敢當と文化交渉—奄美諸島を中心として—」、『東アジア文化交渉研究』創刊号（関西大学文化交渉学教育研究拠点）、2008、159-177頁。高橋誠一「那覇市壺屋地区における石敢當と集落形態」、『アジア文化交流研究』第3号（関西大学アジア文化交流研究センター）、2008、7-23頁。高橋誠一・松井幸一「奄美大島龍郷町の集落と石敢當」、『東アジア文化交渉研究』第3号（関西大学文化交渉学教育研究拠点）、2011、359-394頁。

24) 森孝男「ヒンプンの諸相からみた中国文化の展開」、『東西学術研究所創立六十周年記念論文集』、関西大学出版部、2011、221-241頁。森はヒンプンを魔除け、目隠し、防風などの目的で、屋敷地内に主屋と独立して存在する民家の付属建築物と規定している。福建省など華南地方から南西諸島に入った文化要素と考えられるが、漢民族の東南アジアへの進出によってベトナム、バリ、シンガポールなどにもみられる。沖縄本島の上層にまず受容されたヒンプンがそれぞれの地方の伝統的な文化との関わり方の違いから、現在では八重山列島や周辺離島に濃密な分布をする。受容者の期待する機能、すなわちヒンプンの使われ方の相違によって、主屋との位置関係配置が異なり、小浜島のように来訪神を迎える儀礼空間として前庭を創出する機能を付加するなど新たな展開も見られる（森孝男「住まいの変容と伝統儀礼—沖縄県小浜島のヒンプンを中心に—」、『関西大学東西学術研究所紀要』、第44輯、2011、11-28頁）。

25) 橋本征治「黒潮ルートの根菜農耕文化—台湾・フィリピンと琉球弧の島々—」（橋本征治編『海の回廊と文化の出会い—アジアと世界をつなぐ—』、関西大学出版部、2009、195-203頁）。

続あるいは末娘を重視し、隠居制がいまだに顕著なものこの地域の特色である²⁶⁾。この連合は、ふつう松浦党と呼ばれる。武家集団というより、総領を中心としたお互いが平等の権利を主張しながら、ゆるやかな連合体を形成し、実力あるものが統率者として推戴される。漁業が中心であるが、わずかな農地は均分相続によって耕地を細分化していくため、インボリューション（回旋、内向的発展）、貧困の共有といった概念に通じる性格をもつ。女性にも相続権があり、婚姻によって領主的な地位にまでのぼりつめた者さえいるなど、危険と豊漁・不漁の差が大きい海洋集団が生き延びる術をもった社会組織でもあった。

小値賀島^{おじかじま}は平戸方面からの流入によって五島列島の中ではいち早く開拓が進んだ島で、近世には壱岐から移住した小田氏を中心とした近世西海捕鯨の一基地となる。捕鯨衰退後もそれにかわる鮑・海藻・鯛などの海の恵みで栄え、主邑の笛吹には遊郭や芝居小屋まであった。倭寇・海賊の根城とされた西海の島々では、中国や朝鮮の人びととの通婚も珍しくない開放性があり、人びとの移動に対して抵抗感もあまりもたない。ただ五島は山がちな土地ゆえに、農地の平等主義的慣行は土地という農本主義に固執すればすぐ限界が見えてくる。これは豊漁不漁の差が大きい水産物を皆で分有する海民的な慣行である²⁷⁾。その一方で、五島列島は中国大陸への渡海の中継地点、避難場所でもあった。

天草諸島は天草上島・天草下島を中心に120余りの島からなる島嶼地域で、全島がほとんど低山性の山地で、平地はごくわずかしかない。この天草は、外世界、とりわけ西方（大陸中国、あるいは東シナ海域）のからの文物、思想、宗教などがいち早く入りやすく、かつそれが保持されやすい隔絶性も備えていた。天草は幕府の直轄領（天領）であり、現在でも同じ熊本県に所属しながら、肥後熊本藩とは心理的距離も物理的距離も遠い。鎖国下でも異教が見過ごされる装置を有していた。平戸・生月・五島列島と並ぶキリスト教殉教の史跡が多く、隠れキリシタンといわれる土着宗教と混淆した宗教が明治初期まで潜伏して信者に継承されてきた。

(6) 南シナ海

緯度0度から北緯23度付近まで広がり、中国本土南部（台湾海峡以南）、インドシナ半島、台湾島、フィリピン諸島、カリマンタン島で囲まれた海域である。面積232万km²、平均水深1140mと、東アジア「地中海」のなかでは最大の広さを有する。その縁海にはトンキン湾、ハロン湾がベトナム北部に奥深く入り込んでいる。これは東シナ海域の長距離交易にとっては遠回りである。むしろ香港やマカオ、廈門を拠点した東南アジア諸国との交易や、華南地方の華人の移住や経済投資によって栄えた。この域内にある南沙諸島（Spratly islands）や西沙諸島（Paracel islands）の領有権や資源開発などをめぐっては東南アジア諸国と中国の間で主張が対

26) 内藤莞爾『五島列島のキリスト教系家族—末子相続と隠居分家—』、弘文堂、1979、全393頁。

27) 野間晴雄「松浦のなかつち—小値賀島遺囑—（出逢いのかたち3）」、『月刊地理』、第42巻7号、1997、16-17頁。

立しているほか、近海洋における航行の自由などをめぐり国際的な関心を集めている。ベトナムは東南アジアで唯一の漢字圏の国であり、そのなかでも海域世界との結びつきが強い中部、旧安南の地であるフエを対象としたフエ大学歴史学部との共同地域研究を行ったので、詳しい記述は省略する²⁸⁾。

3. サブ海域内における文化交渉の事例

“東アジア「地中海」”は、総体としていくつかのサブ空間である緑海や小地中海などの集合体であり、海域として一体化した研究上の操作概念でもある。現代の情報ならばまたたくまに全域に伝わるが、歴史的には全域をくまなく移動したり交流したりする人やモノはそう多くはない。むしろ非常に少ないといってよい。それでは、そこに生活する人びとにとっては、どれほどの範囲がその行動空間や心理的距離／空間であったのだろうか。ここでは東シナ海と日本海という2つのサブ空間での経済や文化の交渉・交流をとりあげてみたい。前者が日常生活レベルの交流、後者が中距離・遠距離での商業的交流や文化交渉である。いずれも中期的な時間による地域史である。

(1) 八重山列島における遠距離通耕と人頭税

琉球王国にとって沖縄本島の首里を中心とする版図からいちばん離れた南部の地域が先島諸島である。そのなかで最も南に位置するのが八重山列島である。那覇から石垣島の中心部まで410kmあり、さらに付属の離島ならば500km近い距離となる。先島諸島は宮古列島（諸島）、八重山列島（諸島）、尖閣諸島の20の有人島、24の無人島からなる。その中の八重山列島は、石垣島、竹富島、小浜島、黒島、新城島（上地島、下地島）、西表島、由布島、鳩間島、波照間島の石西礁湖周辺の島々と、西の東シナ海の絶海の孤島が与那国島の10の有人島やその周辺の無人島からなる島嶼群である。このうち「高い島」が石垣島、西表島、与那国島の3島で、あとの島は大部分が隆起サンゴ礁からなる「低い島」である（図3）。



図3 小浜島から石西礁湖と「高い島」西表島を臨む
(2011年1月筆者撮影)

八重山列島が琉球王府の直接支配下に入ったのは16世紀初頭である。一般にはオケヤアカハ

28) 野間晴雄、西村昌也、篠原啓方、佐藤実、岡本弘道、木村自、水野善寛、熊野建、Nguyen Văn Đăng、Nguyen Minh Hà「ヴェトナムのフエ旧外港集落の天后宮と閼聖殿の調査基礎報告」、『東アジア文化交渉研究』第2号、2009、261-288頁に概要を略述した。

チの乱をその契機としてあげる。アカハチは波照間島で生まれ石垣島大浜に移り勢力を拡大する。先島諸島の覇権をめぐって宮古の豪族であった仲宗根豊見親が琉球王府側について、その連合軍によって鎮圧された1500年の事件である。それ以前から琉球へ税として農作物を貢納していた。『李朝実録』成宗10(1477)年の条に、与那国島に金非衣ら3名の朝鮮人が漂着したことが記されている。西表島、波照間島、新城島、黒島を經由して、石垣島には立ち寄らずに、多良間島、伊良部島、宮古島、琉球国、薩摩、博多から朝鮮海峡を越えて朝鮮に帰還している。この史料では、漂着した与那国の状況がいちばん詳しいが、經由した島の状況も簡略に記している。それをまとめたのが図4である。

与那国は「専稲米、雖有粟、不喜種」「山多材木、無雑獸」とあり、稲と粟が栽培され、そのうちでも稲作が重要な中心作物であったことがわかる。稲作は「水田則十二月間、用牛踏播種、正月間移秧、不鋤草、二月稲方茂、高一尺許、四月大熟、早稲四月畢刈、晚稲五月方畢刈、七、八月収穫」とある。冬作としての稲作で、台風前に収穫すること、牛による踏耕と無除草という東南アジア島嶼部、マレー系の耕起法が行なわれ、早稲と晚稲の二種の生態品種を区別していることがわかる²⁹⁾。塩、醬なし、磁器はもたず粗製土器のみだけだが、稲倉は別棟としてもっていたことが記されている。また、木材が多く森林植生の存在を指摘している。

ところが波照間島の項では、黍、粟、麦が産物としてあがっており、稲と材木は所乃島から移入するとある。黒島、新城島も同様で、麦は大麦と記載されている。宮古島と石垣島の間位置する多良間島も同様の記述がある。所乃島は西表島に比定され、稲と粟の割合は1:3で稲が卓越したこと、周辺の低い島が材木を西表島に求めたことがわかる。また、池野は造船用の材木と稲作によって西表島での拠点を北海岸の祖納に推定する³⁰⁾。周辺の「低い島」は材木を西表島に求めた。

しかし、琉球列島でも本島につぐ面積を占める西表島は人口も少なく、ひとからは「魔の島」として恐れられてきたのは、ひとえにマラリア有病地であったことに帰される。とりわけ、この地域は日本国内にかつてはひろく分布した軽微な三日熱マラリアのみならず、重篤な熱帯マラリアや四日熱マラリアの3つのタイプが併存していた³¹⁾。高温多湿なマングローブ林や清涼な谷水はハマダラカの繁殖に好適な環境であった。健康面では安全な「低い島」も、居住面では飲料水に苦勞する。湧水地点に集落は集村として立地したが、その取水には多大な苦勞をした。しかも石灰質土壌のため湛水が不可能で、畑作しかできない。必然的に、粟や副次的に黍作と大麦がこの「低い島」の食用作物となった。

29) 渡部忠世「八重山の稲の系譜—蓬萊米と在来米—」(渡部忠世・生田滋編『南島の稲作文化—与那国を中心に—』、法政大学出版局、1984、67-91頁)。

30) 池野茂『琉球山原船水運の展開』、ロマン書房、1994。

31) 野間晴雄「近代日本におけるマラリアの地域生態と保健行政」、1999年10月23日、東北地理学会1999年秋季学術大会(リフレ富岡)での発表。要旨は『季刊地理学』第52巻1号、2000、86-87頁に所収。

その一方で、米を基本とする近世日本の枠組みは琉球王府にも形式的に適用された。それがその土地の農業生産力を米の生産力で示した石高制である。田畑の租税負担能力を高で示したものである。しかし宮古や沖縄本島のいわゆる「低い島」では粟の上納を基本としている³²⁾。八重山史を専門とする得能は、「近世の八重山に賦課された人頭税の上納穀は米だけであったのか」という疑問を呈する。畑租として粟が上納物になっていたこと、「米・粟」という文言が田と畑の租税を意味するが、両者は単純に合算され、しかも「～米」といってもこれが米というより、穀物全体をさすこと、「球陽」の漢文史料では、コメを大米、アワを小米と記載していることをあげる³³⁾。賦課において八重山では米・粟の区別がないこと、二度夫賃米（月2～3回の労役の代わりに納める物納）として粟を貯えさせ³⁴⁾、古米上納の原則から、粟での上納が制度化されていったとする³⁵⁾。

八重山で明和（1771）8年4月24日に発生した琉球史上最大の津波では、最大28丈2尺（85.4m・石垣島）の異常な高さが推定されている。石垣島中心部の石垣、大川、登野城、新川の4村（現在の石垣市四箇といわれる市街地部）は津波の大被害にあい、文嶺（ブンニ）という内陸の高台に移転させるほか、元の場所での再建も試みたりした。そこでの史料として以下のような「覚写」がある。

（前略）

四ヶ村田畠之儀も多分遠所江有之、稲粟苜取小舟を以石垣泊積越、夫の文嶺江持越候儀人夫之費相成、且御用布之儀、浜江かりや相構、女共詰居潮晒仕候処、村遠相成而ハ不勝手ニ有之、且大地方并離々百姓村越ニ付而ハ過分致物入候而ハ極々及衰微へく積みニ而引移不申、四ヶ村百姓致混乱罷居候付³⁶⁾

（以下略）

「覚写」では、稲と粟ともに、小舟で島内の他所から四箇の港に荷揚げされ、それを内陸まで

32) 得能壽美『近世八重山の民衆生活史—石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク—』、榕樹書林、2007、53-54頁。

33) 現代中国でも脱穀した粟を小米（xiaomi）という。

34) 「御手形写拔書」乾隆三十六年卯年（1771）の条には以下のようにある。

米 千百七拾六石九斗六升
正頭四千九百四人式度夫賃

（中略）

右者式度夫賃米之内此節太分正頭相減、此中之通上上納方不相調、当分現人数取立本行之通被仰付度旨被申越相違及言上、其通被仰付候間、来年の上納方可被申渡候（以下略）

（『御手形写拔書（石垣市史叢書11）』、石垣市総務部市史編集室、1998、9-10頁）。

35) 前掲11、244-245頁。

36) 『御手形写拔書（石垣市史叢書11）』、石垣市総務部市史編集室、1998、13-14頁。

さらに運ぶ手間を問題とする。女性が浜に仮小屋を作ってそこで布の潮晒し（布を海中に広めて浮かし、海中で晒し色どめをする）するためにも、海岸に近接した立地の便利さをあげる。つまり内陸にも稲のみならず、粟などの畑作物の遠距離通耕がごく一般的であったことを推測させる。

石西礁湖というのは石垣島と西表島の間広がる竹富島や黒島など「低い島」を含む日本国内最大のサンゴ礁海域の名称である。ここを住民は自由に船で往来してきた。かつてはサバニといわれるマツの一材で造る刳船くしふねであり、公儀の船ルートでない農民の生活の海域ルートでもあった。またそれは、農耕にとどまらず、造船や家建築の材木や飲料水など生活必需品を得るための「海と島々のネットワーク」でもあった³⁷⁾。

人頭税の影響で、琉球王府の未開墾地の多くは「高い島」か、石垣島の四箇以外の地であった。保水力のないサンゴ礁の人口稠密な島から、別の島、別の村への移住政策であり、なかば強制という悲惨なイメージで語られてきた。それを得能は、「通耕という生活・耕作の形態を前提に、島・村における人口増加とそれともなう未開墾地の耕地化にこたえるための「対策」であった」「対策が政策になっていく過程」としてとらえる³⁸⁾。けだし卓見である。

(2) 北前船によるネットワークの諸相と進化

北前船とは、歴史の上では、江戸中期に発生し、明治30年代まで大坂（大阪）と蝦夷地を結ぶ日本海航路に就航した無動力帆船による廻船をさす³⁹⁾。北前とは上方の間人が北陸・あるいは日本海沿岸の北国方面をさしていう歴史的地域名称である。ここでいう日本海という大きな“東アジア「地中海」”の縁海で北前船は生まれ発展した。太平洋の黒潮に比べて流速の遅い対馬海流は、和式帆船にとって相対的に与しやすい対象であった。しかし、冬場の日本海は荒天が続く、海域での活動は著しく制限される。

北前船の前身は、ハガセ船（羽ヶ瀬船／羽瀬船）、北国船という、船底両側に刳り出しのおも木（面木／重木）に特徴を持った船体構造の船で丸木船・刳船からの進化と考えられる。石西礁湖が生活のための農民の営みであったとすると、北前船は運搬用の船を所有する商人、廻漕業者の営みである。北前船交易は近世後期から明治期に行なわれ、福井・石川県に船主が多い。それまで近江商人に雇われたこれらの地域の船頭が北前船船主として成長した例も多い。北陸地域が敦賀の地峡部を介して近接していたことによる効果といえる。明治期になって近代の大手船会社による大量輸送や鉄道網の整備されると、ローカルな沿岸廻漕はしだいに縮小する。

一方、弁才船／弁財（べざい）船（せん）は中世末に瀬戸内海で発達し、近世期に上方～江

37) 前掲32, 251頁。

38) 前掲32, 3頁。

39) 本節は、野間晴雄「北前船を俯瞰する一点と線の残映—」、『石川の自治と教育』11月号, 2011（通巻第62巻, 通巻655号, 16-31頁）、の主要部分をまとめたものである。

戸間の菱垣廻船や樽廻船にも応用された船である。根棚、中棚、上棚を順次に組み合わせていく棚板構造をしている。四角帆が装備されたことによって、櫓を漕ぐ水主が不要となった、より高速な大型船である。それに類似したのが二形船、伊勢船で、九州・四国・東海地方で使われた。

この二つの異なる船体構造の船のうち、前者は18世紀中頃に衰える。もともと瀬戸内海で発達した弁才船が、北国と上方を瀬戸内海でむすんだ西廻り航路の発達によって、日本海沿岸にも進出していき全盛期の北前船の主力となった。加賀や越前で、近世後期から明治期にかけての沿岸廻船を弁才船というのはそのためである。船の技術史からは、北前型弁才船という用語まである。

北前船という日本海の沿海廻船は、日本海縦貫鉄道の発達が遅れたこともあり、西洋型帆船や汽船が発達した明治期にも併存した。日本では、風に頼った無動力帆船から、近代的動力船にいきに移行したのではない。むしろ、改良型和船の全盛は明治前期にあったことこそ重視すべきである。

それでもしぶとく生き残った北前船船主もある。たとえば、明治29（1896）年、北前船主が中心となって設立された日本海上保険会社は、加賀市瀬越の広海二郎や南越前町河野の右近権左衛門らが中心になって設立された。船の遭難によるリスクを保険でカバーしようとする自衛策でもあった。上方に運ばれる「上り荷」としては、北陸・東北からの木材や米穀、蝦夷地の干魚・塩魚・魚肥、昆布などで、逆方向の「下り荷」には、塩・鉄・砂糖・綿・反物・畳表・蕨などの雑貨が北陸・東北・蝦夷地にむかった。その寄港地をノード（点）として、人と物資流通のネットワーク（線）を地理的視点で考えたら、どんなことが見えてくるだろうか。その見取り図をここで描いてみよう。

北前船の最大の経営的特徴は買積を基本とすることである。買積とは船主が荷主を兼ねる場合が圧倒的に多い。沿岸を航海する途中で、行く先々で積んだ荷物を販売しながら、寄港地でさまざまな商品を購入して、それをより高く売れる地域で転売する形態である。北前船が「海の商社」といわれる所以で、中心となる商品としては次のようなものがある。

バルク品としての木材、米、酒、醤油、高収益商品で地域間価格差が大きいもの、人びとの生活にとって生活必需品の塩や米、産業用の必需品としての干鰯、干鰯などの金肥、藁、縄、筵、嗜好的珍奇品で蝦夷地でしかとれない昆布、最上地方の紅花や米沢地方の青苧、讃岐や薩摩の砂糖などである。ニシンは蝦夷地にとれる場所がほぼ限定され、回遊するイワシもその豊凶の差が大きい。それをもとにした上方の集約的綿作や野菜栽培、さらには米作にも欠かせないのが、北前船の運ぶ魚肥であった。

この買積方式は、投機指向であり、船の運航は不定期だが、柔軟に小回りをきかせて価格の高い港に立ち寄る。現在のように日本全体が鉄道や高速道路網によって平準化され、遠隔地や産地からの距離によって大きな価格差がない商品も多いが、この感覚を北前船活躍時代に適用

することは出来ない。米や衣類などの価格も地域によって大きく異なっていた。

蝦夷地は松前藩の場所請負制による沿岸開発により近江商人がいち早く目をつけた地域である。彼らは干鮓や昆布を上方に運んで莫大な利益を得た。船で働く人びとの多くは北陸・東北地方からの季節的出稼ぎ者や恒常的な長期滞在者、それに移住者で占められていた。仕事はきついがそれのみあうだけの高収入が期待できる。だから蝦夷地、いや近代に北海道となつてからの移住者にとって、さらに日露戦争後は樺太などにも進出した人びとにとっても、米飯は何よりもありがたい重要な食糧であった。現地調達可能な畑作物・雑穀などを食べているのではなく、むしろ本州の人びとよりも贅沢に米の飯を食べていた。軍隊では兵士の士気を高め、体力をつけるため、腹一杯、栄養ある食べ物が供給されたのと似た状況があった。したがって、蝦夷地・北海道で米は驚くほど高く売れ、しかも相当な需要があった。

この買積制は、官に頼らず、機動力を活かした民・私の重視でもある。しかしその裏返しは、ハイリスク・ハイリターンであり、価格の急落による大損も覚悟しなければならない。そのため、北前船寄港地での情報ネットワークがなによりも重要となる。現代のようにインターネットや電話などが整備されていない時代には、寄港地に自分に有利な情報を与えてくれる現地駐在員の商人を抱えこむことが必須であった。扱う商品量は、危険分散のために、多種類かつ少量が一般的である。しかしいったん儲かるという情報を得ると、一気にその商品をかき集めて、短期に集中的に売り抜けることも辞さない。その意味では商売しながら移動する形態であり、経済学で言う機会的な取引慣行である。

この買積の対をなす用語が運賃積である。これは荷主の依頼によって荷物を運送する形態で、安定指向であるが、ときとして藩の中樞など官との癒着がおこりやすい。藩米を上方へ輸送することがまず主眼となったし、そのほか藩の物産を運ぶことも多かった。ローリスク・ローリターンであり、物量は大量で、定期的・恒常的な運航が行われる。

越前河野の右近家の例では、船数、収益とも幕末にピークを迎えている。それまでは東国、蝦夷地に進出した近江商人のもとで輸送を担っていた船主たちが、みずからその地域間格差を利用し、商品を売買しながら航行する手法を学んで実践することで隆盛を迎える。18世紀になって蝦夷地でのニシン、昆布産地がより遠方に移動し、近江商人自体の独占的な行使力が衰えてきたことも、彼等が台頭していく素地となった。買積制は海の行商ともいえる商形態である。

ただし、この北前船による商いには、前述したように明確な季節性が存在した。日本海は冬場の約4ヶ月（11～2月）は荒天のためほとんど沿岸であっても運航ができない。オフシーズンが今もはっきりと存在するこの山陰・日本海側の特質を埋めあわせるのが、瀬戸内での廻船である。波の穏やかな多くの島々が点在するこの地中海は、航行する人にとっては、風待ちや荒天時の一時的避難が可能な多くの安全な港が存在した。しかし、瀬戸内海の潮流は、多島海ゆえ、瀬戸といわれる狭い水道部分がたくさんあり、その動きは頗る複雑である。倉橋島と本土部分の音戸ノ瀬戸、下蒲刈島との間の女猫瀬戸^{めねこ}、因島と向島間の布刈瀬戸など、いずれも



図5 広義の北前船寄港地
(野間晴雄 2011)

船にとっては急に潮流が速くなり、航行には高度な操船技術が要求される。そこに村上水軍に代表される海洋集団が生まれる素地があった。

海流に逆らって航行するのは弥帆といわれる補助帆をもった弁才船型の和船では可能であるが、原則は風にのることである。風待ち港、避難港は潮待ち港でもあった。20~30km 間隔に室津、坂越、下津井、鞆、尾道、竹原、御手洗、三之瀬、上関、沖家室、三田尻などの沿岸や離島の港が繁栄するが、北前船が延伸された西廻り航路の発達によるところが大きい(図5)。

北前船では上方から北陸・東北や蝦夷地・北海道へいくことが下りであり、その反対、すなわち北国から上方へ行くのが上りである。これが一年のサイクルで、冬場のオフシーズンをさけて運航が行われたのが基本であった。

北前船にはどんな階層の、どの程度の人数の乗組員がいたのであろうか。史料が教えるところでは平均で2~5名ほどで、船頭(船の操縦)と雇用労働者者(水主)にわかれていた⁴⁰⁾。そのほか、実際に船には乗らないが経営者でもある船主が別にいる場合もある。有力な船主では3~6艘ほどの船を所有して利益を上げるものもあったが、その一方で、船頭が船主を兼ねる

40) 福井県河野村編『地域から見た日本海海運 第5回「西廻り」航路フォーラムの記録』, 2001, 福井県河野村。

個人経営的な零細船主も存在した。他方、規模が大きくなると、総合商社の機能が付加され、取扱商品の多様化やさまざまな注文に応じたきめ細かなサービスも行われた。

これらをまとめて、北前船の取引の種類の発展系列をまとめると以下ようになる。

① 前史

北前船の前史には、近江商人の北関東や東北、蝦夷地への進出がある。有力な東国への出店、進出を行った出身地としては、八幡、五個荘、日野、さらには、彦根近郊の薩摩、大藪・八坂^{はっさか}などがあげられる。その多くが中山道や朝鮮人街道に沿った交通至便な回廊地帯に位置する。日野も伊勢への短絡路である御代参街道沿いの有力な在郷町である。彼らが行商で扱う商品は、もとは京都の古着や反物、それに薬などであったが、旅先でそれぞれ商売ネットワークの勘を働かせて、価格差による差益や、彼地での醸造業などの常設店舗の開設などでしっかり根を下ろしていく。

② プロト系

さらに、近江商人は、敦賀を経由して近江は北陸から東北日本海沿岸にも地歩を固め、蝦夷地での漁業で大きな利益をあげるものも出てくる。陸路でも海路でも彼らの商売手法が貫徹する。当時、蝦夷地のアイヌとの交易で大きな利益を上げたのが、米がとれない松前藩である。この松前藩と近江商人が結ぶことで、近世の日本海広域ネットワークが生まれる。中央日本の最狭隘部での、京都や大坂、さらには名古屋にも近い回廊的性格が近江のトポスである。その輸送の基本は蝦夷地—敦賀であり、ここで陸揚げされたが荷は七里半越え、塩津街道を経由して湖北の塩津や海津^{かいづ}に陸送され、ここから琵琶湖を湖送して大津へ、さらに逢坂越えの陸路で京都へ運ばれた。これらは「荷所船」で運賃積が基本であった。その水主として雇われていたのが越前・加賀・越中の沿岸寒村の人びとであった。

③ 拡張系 a

このプロト系の廻船のなかでは、水主の近江商人への従属がきわだっていたが、やがて彼らとその商売のやり方を学んで、独立していく傾向が18世紀後半以降に顕著になる。これが北前船主の誕生である。石川県の橋立、塩屋、瀬越、本吉、安宅、大野、金石^{かないわ}や福井県の河野、富山県の東岩瀬、伏木などが代表的な集落である。

④ 拡張系 b

③のタイプではまだ、敦賀—蝦夷地という日本海のそれも北半分が中心であったが、この拡張系 b では、酒田から佐渡小木、能登福浦などを経て、山陰海岸、温泉津^{いづのつ}、隠岐、下関から、瀬戸内海を経て大坂への海路での大量物資のルートが確立された。加賀・鳥取藩、最上川流域の出羽諸藩の藩米大坂廻漕がきっかけで、寛文11（1671）年に河村瑞軒がそれらの先駆的な遠隔地航走を、幕命を受けて完成させた。このルートによって、北前船が西廻り航路に包摂され、蝦夷地・東北日本海沿岸と山陰海岸・下関・瀬戸内海・大坂が連鎖して結合した。

⑤ 拡張系 c

北陸の北前船主による広域遠隔地廻漕である拡張系 b は、北陸以外の人びとに模倣され、「買積船」が日本各地で成立する。たとえば但馬の山陰海岸、諸寄の例は、西廻り航海域全体をひるく回るリージョナルな商いではないが、西南日本のローカルな廻船として活躍する。隠岐、島後^{じょうご}西海岸の森林が多い旧布施村は、北前船、西廻り航路の避難港として、また地元の木材を廻漕する商業力・財力で、長く町村合併を拒んだ例でもある（1994年に隠岐の島町として合併）。

⑥ 拡張系 d

東廻り航路は酒田より津軽海峡を北上し、三陸・太平洋岸を南下して、石巻、平潟、那珂湊、銚子、小湊などを經由し、江戸に入るルートで、これも河村瑞軒によって開発された。ただし、この太平洋岸、とりわけ三陸沖、鹿島灘や房州沖、浦賀水道は潮流も激しく、航行は困難をきわめた。その沿岸の集落で、北陸の北前船主のような起業精神、冒険心に富む個人船主をほとんど産み出さなかった対照は際立っている。

上の沿岸における東西二大航路の確立は、最終的には御城米の運搬、すなわち基本的に畑作地帯である江戸の実質「首都」化を食糧供給の側面から確保したものといえよう。江戸の人口は少なくとも最大時に百万人を超えており、ロンドンやパリ、さらには清朝中国の諸都市やインドの大都市をしのぐし世界最大の消費都市であった。各地の大名やその家族・家臣が住み、彼らが米を食し、かつそれを現金化して藩財政に充てる構造ができあがっていた。そのための米の輸送は定期的な運賃積が基本である。

これと棲み分ける形で、隙間を狙うアウトサイダー船主も当然いる。それが北前船主の基本的性格となる。規模の小ささ、官との結びつきの弱さを元来有していた。そして、成功した船主は、故郷で豪壮な邸宅を構え、地元のために産業を興し、文化振興に尽力する例も多い。

この段階では、大坂から、紀州、熊野灘を經由して、太平洋沿岸の諸港を最短距離で結んだ菱垣^{ひがき}廻船、樽廻船と結ぶことで、上方と江戸という二大拠点の物流ネットワークも完成した。暖地性のみかんを江戸に廻漕して莫大な利益を上げた紀伊国屋文左衛門、湯浅の醤油の野田、銚子への移植、紀州漁民の房総半島への移住などもその交流の例であろう。一方、伊勢湾ではローカルな尾州廻船（内海船）が活躍していたが、知多半島の内海を拠点として、江戸と上方の中間地点として地の利を活かした商売が行われた。

リージョナルなネットワークも外的要因、内在的要因、技術革新などで大きく変化する。海を媒介とする文化交渉も、このようなローカル、リージョナル、グローバルな点・線やネットワークの累積体としてとらえる必要がある。“東アジア「地中海」”は、その事例として、数多い島嶼（日本、中国、台湾）を中継あるいは起終点とする特色ある様相を示している。

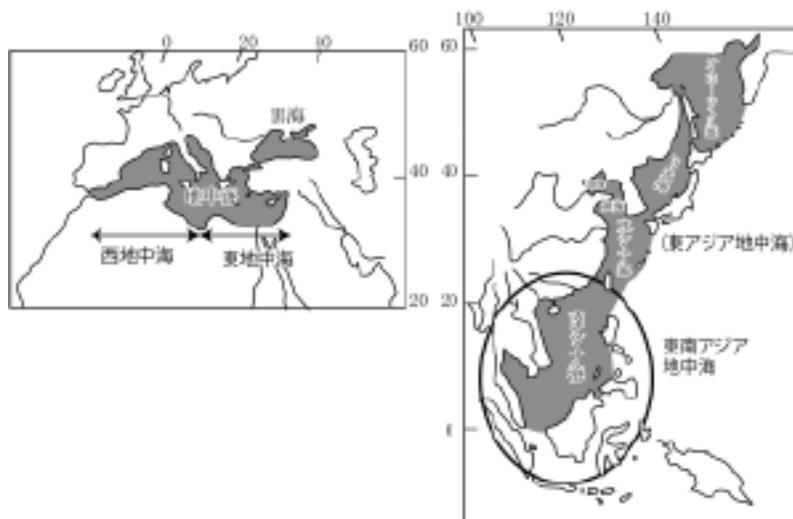


図6 等スケールでのヨーロッパ地中海と東アジア「地中海」

4. おわりに—ブローデルの『地中海』に寄せて—

ヨーロッパ地中海に関しては、フランス・アナール学派の総帥であるブローデルが全体史を目論んだ大著『地中海』⁴¹⁾で16世紀後半の50年間を対象として、3つの層、すなわち刻々と変化する事件が生起する時間（政治）、緩やかに何世紀という次元で動く集団としての人間追営みを分析する中期的時間（社会現象）、ほとんど不変ともいえる緩慢な時間（自然環境）から分析した。ただその重点は後二者にある。時として、百年オーダーを超える千年オーダーの動きをも見据えながら、上の三層を、長期、中期、短期の時間の順に配置した。巨視的史観に微視的史実を惜しげもなく挿入した、鳥の目と蟻の動きというべき姿勢が通徹する⁴²⁾。そのうちで第1部はまさに地中海の地理的基盤、歴史における自然環境の意義と人間との関係を、山から高原・

41) フェルナン・ブローデル著、浜名優美訳『地中海』、全5分冊、藤原書店、1991-95。原著名は *Le Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II, Deuxième édition revue et corrigée*, 1966（『地中海とフェリペ2世時代の地中海世界』）とあるように、地中海世界という地中海をとり囲む国家領域にとらわれない地域に主題の焦点がある。しかも時代的には在位1556～98年のスペイン王（ポルトガル王としてはフェリペ1世）で、イタリア、ネーデルランド、新大陸に広大な海外領土を有して、新教徒弾圧、対英・対仏交渉、イスラム帝国であったオスマントルコの撃破（レバントの開戦）、ポルトガルの併合などを行った16世紀後半のスペイン黄金時代を扱っている。

42) オスマントルコ史を専門とする鈴木董は「灰色の理論体系が寒々とした姿をさらすような骨格だけの全体史でなく、まさに現実こそ緑であることを雄弁に物語るような、彩りあふれるイメージの万華鏡のごとき全体史」と表現している（鈴木董「ブローデルの『地中海』と「イスラムの海」としての地中海の視点」、川勝平太編、前掲7、43頁）。

台地・丘陵，平野と周辺部を先に記述したのち，地中海の心臓部としての海を沿岸部地帯・島の記述に移行する。そのあとで，地中海の域外にあたる地中海の境界としてサハラ砂漠や域外の地峡，そして大西洋を扱う。

面的には一体化したヨーロッパ地中海であるが，ビザンツ，オスマントルコが支配していた非カトリック世界，イスラム世界が東地中海にある。ただ，ブローデルが地中海の全体的把握といいつながりながらも，西地中海に軸足があり，イベリア，南欧フランス，イタリアの三地域が中心であったことは否めない（図6）。

われわれのプロジェクトが標榜する「周縁アプローチ」には「周縁から見る」と「周縁を見る」との2つの方向性がある。しかも対象という以上に〈中心〉と〈周縁〉に特別な意味は付与しないことを前提とする⁴³⁾。この掣みにならば，ブローデルは，地中海の周縁⁴⁴⁾に身を置いた当時者として，域内の中心と周縁のみならず，域外も含めた全体を俯瞰しようとした。“東アジア「地中海」”を論じる私は，中華という同心円では最も周縁にある日本列島からの視点であるから，この論法では「周縁から見る」ことになる。しかし本稿の対象は周縁ではない。“東アジア「地中海」”こそが，核・中心であるとする視点である。そこから見えてくるのは何か。

“東アジア「地中海」”は縁海的ではあるが，開口域が数多くあるヨーロッパ地中海よりはオープンなシステムである。隔てるものとしての海でなく，「つなぐものとしての海」というユーラシア大陸をぐるっと取り巻く海の性格⁴⁵⁾がこの“東アジア「地中海」”にもあてはまる。そのサブ空間が独立した環状の交流圏をもつとともに，さらにその連鎖が大きな交流圏を形成している。東シナ海，南シナ海，日本海はそれぞれに独自の歴史生態基盤の地域性を有しながらも⁴⁶⁾，全体としての共通性もある。その共通性の一つは，人口稠密な沿岸や背域に農業空間が存在することを私は強調したい。そのため，大陸中国から見れば周縁である日本列島を被っていた史観は，内陸的な，土地に重きを置く，水田稲作重視の農本主義である。それ以外の生業，すなわち漁撈，山に関わるもの，商業，漂泊者などは数からいえば少数派であった。

ところがその海が目玉され，海洋史観というべきものが重視されるようになったのは1990年代以降である。「アジア史の中の日本」は確固たる視点と多くの新しい知見を生み出した。

しかし，そのことと，絶対位置と量的に何が多く優占するのかは別次元の問題である。まず，ヨーロッパ地中海は緯度にしておよそ30度～47度と緯度差は20度に満たない。東アジア「地中海」

43) 藤田高夫・藪田貫「特集にあたって—「周縁から見た中国文化」という視点—」、『東アジア文化交渉研究』(関西大学文化交渉学教育研究拠点)，第2号，2009，5頁。

44) ブローデルは，北仏のロレーヌ地方，ムーズ県に生まれ，アルジェリアに赴任してリセで教えるなど地中海の周縁に身を置いた経験をもつ。

45) 田中耕司・小泉格「海と文明」(田中耕司・小泉格編『海と文明(講座「文明と環境」10)』，朝倉書店，2008(新装版)，3-4頁)。

46) この行論からは，黄海と渤海は東シナ海の下位のシステムとみなすべきだろう。

海」は赤道から北緯60度を超える。このうち、東シナ海と日本海だけに限っても、北回帰線の北緯17度からタタール（間宮）海峡の北緯50度の33度以上の緯度差があり南北の気候差が大きい（図6参照）。沿岸の年間降水量も前者が700mmから300mm前後であるのに対して、後者は600～2000mm以上と多い。農業生産力や海域の生物多様性は“東アジア「地中海」”の方がずっと大きいし、相対的に資源が豊かな海域でもある。

また地理学徒の目からすれば、事象がどれだけ空間を占有しているかという視点は、質の問題、文化のありかたにも影響するとみなす。その意味では、3つの大陸に囲まれたヨーロッパ地中海と、一方に島嶼列が連続し、もう片方は大陸である東アジア「地中海」とは、ものの流れも人の流れも根本的に異なる。とりわけ、黒潮洗う太平洋に面する日本列島には生業としての海洋民族的な性格も併存する。“東アジア「地中海」”を、沿岸航路を中心にしながらもジャンクで縦横に移動した中国商人は、一方ではシルクロードといわれる長大な陸路の開発者でもあった。しかしヨーロッパ地中海のように、軍事力を駆使して海域を制圧する姿勢はなく、あくまでも商業・交易に徹していたことは留意すべきである。中国を海洋社会とみるには、その合わせ鏡である陸域アジアの状況を熟慮しなければ、過度の海洋史観に陥りやすい。儒教も仏教もその陸域的な性格は払拭できない。そこがイスラムの海洋的、移動的性格とは異なる。

前近代の中国・朝鮮では人口から多数を占めるのは定着農民であった。彼らによって沿岸部は圧倒的な人口過密社会を形成していたことは、ヨーロッパ地中海と大きく異なる点である。中原から江南デルタへの移動が満杯になり、政情不安が続くなかで、山東省などからは本来の中国の域外である東三省（東北地方）への農業開拓が19世紀以降に活発化する。沿海中国の南半は耕地狭小なため、域内のフロンティア（台湾）、域外のフロンティア（東南アジア）への出稼ぎ・移住の動きが現在まで継続する。そのリージョナル、ローカルなネットワークを地道に積み上げ止揚して、“東アジア「地中海」”の性格を位置づける方法論が必要となる。

ブローデル「地中海」の時代は、ほどなく大西洋を超えたイギリス・オランダ、フランスの新大陸の覇権争いに移行する前奏曲であった。“東アジア「地中海」”の考察にも、大きな劃期を設定して、中期的動きを地域性と接合させる手法が待たれる。

【付記】 本稿は2011年11月12日の国際シンポジウムでの発表原稿であるが、当日の総合討論で香港大学の鄭倍凱教授（香港城市大学中国センター長）からブローデルの地中海との異同についてのコメントがあった。それに答える形で終章を補足した。なお、研究の一部には2011年度日本学術振興会科学研究費・基盤研究（A）「環東シナ海・環日本海沿岸域の文化交渉と歴史生態をめぐる学術的研究」（課題番号22242028・研究代表野間晴雄）を使用した。